

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

シャリンバイ (*Raphiolepis umbellata* (Thunb.) Makino)

小野幸菜 (東興ジオテック株式会社/日本樹木種子研究所)
sachinaono@toko-geo.co.jp



シャリンバイはバラ科シャリンバイ属の高さ1~4mの常緑低木で、別名タチシャリンバイとも呼ばれる。本州(宮城県・山形県以西)・四国・九州・小笠原・沖縄の主として海岸に生え、朝鮮・台湾・中国大陸・フィリピン・ボルネオに分布する。防潮林・防風林として用いられ、また大気汚染や刈込にも強いため、公園や道路脇の緑化木、庭木、生垣にも利用される⁵⁾。平成21年度版道路土工一切土工・斜面安定工指針の播種工に用いる主な植物にも掲載され、耐陰性が高く、発芽・生育に安定性があり、有機質成分を多く含んだ植生基材吹付工での導入が容易であるとされている。

葉は単葉で互生。革質で光沢があり、両面無毛。形は変異が多く長楕円形~倒卵形、長さ4~10cm、幅2~5cm。まばらに鋸歯があるかほとんど全縁でふちはやや外曲する。葉柄は長さ0.5~2cm。花期は4~6月、直立する長さ5~15cmの円錐花序に、5花弁の白い両性花を多数つける。シャリンバイ(車輪梅)の名は、葉が枝の上部に密に互生するため一見して輪生状を示し、花が梅を思わせることから名付けられたという。樹皮や材にはタンニンが含まれており、煮出した液で染色する大島紬に古くから利用されている⁵⁾。

果実は梨状果で、10~11月に黒紫色に熟し、径7~12mmのほぼ球形で光沢があり、果肉の中には黒褐色の種子が1~2個含まれる⁵⁾。当社のRSセンター(木本種子貯蔵設備、3℃)³⁾で在庫したシャリンバイのデータをまとめると、果肉付き種子の単位粒数は1.2~2.5粒/g、平均重量は0.4~0.8g/粒、種子のみの単位粒数は1.9~4.3粒/g、平均重量は0.2~0.5g/粒である。発芽パターンは子葉が地中に残る地下子葉型であり、発芽したばかりの本葉や枝には褐色の軟毛がある。

結実に豊凶はあまりなく比較的毎年種子を得やすいが、採取後すぐにとり播きするのが望ましい²⁾。シャーレに播種した発芽試験では、採種直後の平均発芽率は85%と高く、休眠性がほとんどないため1.5~2ヵ月で発芽し終える。採取直後の種子含水率は40~45%だが、果肉を除去すると乾燥しやすく、湿潤型種子(recalcitrant seed)のため含水率が35%以下になると発芽率が低下する。RSセンターにおける果肉付きの貯蔵試験では、時間の経過とともに種子含水率が徐々に上昇し、含水率が50%以上になると発芽率が50%以下に低下する傾向が確認されており、種子貯蔵中の最適含水率は40~50%といえる(未発表)。一般的な貯蔵方法(密

閉容器に入れた種子を冷蔵庫で保管)では、貯蔵開始時100%だった発芽率が貯蔵2ヵ月後から急激に低下し、4ヵ月後には0%となったが、RSセンター独自の貯蔵方法では4ヵ月後でも発芽率94%を維持していた³⁾。また、発芽率90%のシャリンバイ種子を夏の常温下に置いた貯蔵試験では、わずか7日間で発芽率0%となったことから低温貯蔵は不可欠であり、種子採取後の貯蔵には特に注意が必要である⁴⁾。

播種工における平均樹高推移の一例として、長崎県でイロハモミジ、ヤマハゼなどと混播した事例では、施工1年後に5~10cm、2年後に約30cmと初期生長は遅いが耐陰性は高く、4年後以降は下層の優占種となっている。5年後で約100cm、10年後で約200cmと緩やかな成長が確認され⁶⁾、20年後の調査では平均樹高270cmとなり、中には樹高600cm、胸高直径4.1cmに達する個体も確認された(未発表)。

シャリンバイは、奄美地域の希少種であるモッコクモドキ(オキナワシャリンバイ)やソソバシャリンバイと競合する可能性が高いことから、2015年3月に公表された生態系被害防止外来種リストへの掲載が検討されたが、他の侵略性の評価は高くないことなどから掲載には至らなかった¹⁾。このような希少種の生育する地域以外では、播種工において導入しやすい、頼りになる常緑低木といえる。

引用文献

- 1) 環境省. “生態系被害防止外来種リスト” 環境省ホームページ. https://www.env.go.jp/nature/intro/1_outline/list.html (参照: 2016年1月25日)
- 2) 勝田 柁・森徳典・横山敏孝(1998) 日本の樹木種子(広葉樹編), 林木育種協会, pp. 186-190.
- 3) 小野幸菜・氏家豊和(2009) 自生種木本種子の中長期貯蔵技術と早期発芽力検定法, 日本緑化工学会誌 34(4), 593-596.
- 4) 小野幸菜・吉田寛(2014) 国内産在来木本種子を自然回復緑化で用いる場合の種子貯蔵技術の重要性について, 第45回日本緑化工学会大会研究発表発表会要旨集, 14.
- 5) 佐竹義輔ほか編(1995) 日本の野生植物木本 I, 平凡社, pp. 221.
- 6) 吉田寛・古田智昭(2004) 切土法面における厚層基材吹付工(斜面樹林化工法)による木本植物群落の造成事例, 日本緑化工学会誌 29(4), 482-494.



果実



種子断面。上部に胚軸が見える。



発根



本葉展開。子葉は地中に残る。全体に軟毛が生える。



常緑広葉樹と落葉広葉樹の混交林形成を緑化目標とした国内産在来種播種工による法面緑化事例。低木層をシャリンバイが優占する植物群落が形成されている（熊本県・施工16年後）。